目次

八雲立つ（古事記）……8
片歌（古事記）……10
狭井河よ（古事記）……12
久米歌（古事記）……14
春の野遊びの歌（古事記）……16
倭は国のまほろば（古事記）……18
仏足石歌体（古事記）……20
志都歌（古事記）……22
五節の舞（本朝月令）……24
万葉集巻頭歌（万葉集）……26
国見の歌（万葉集）……28
君が行き（万葉集）……30
額田王1（万葉集）……32
額田王2（万葉集）……34
額田王3（万葉集）……36
鏡王女（万葉集）……38
霊魂不滅の思想（万葉集）……40
よき人の（万葉集）……42
大津皇子辞世（万葉集）……44
大舟の津守が占に（万葉集）……46
二人行けど（万葉集）……48
うつそみの人なる我や（万葉集）……50
志貴皇子（万葉集）……52
人麻呂1（万葉集）……54
人麻呂2（万葉集）……56
黒人1（万葉集）……58
黒人2（万葉集）……60
赤人1（万葉集）……62
赤人2（万葉集）……64

憶良と旅人1（万葉集）……66
憶良と旅人2（万葉集）……68
憶良と旅人3（万葉集）……70
憶良辞世（万葉集）……72
坂上郎女（万葉集）……74
家持の家風（万葉集）……76
春愁三首1（万葉集）……78
春愁三首2（万葉集）……80
万葉集閉巻の賀歌（万葉集）……82
東歌1（万葉集）……84
東歌2（万葉集）……86
防人歌（万葉集）……88
浦島伝説の歌（万葉集）……90
思ひせく（古今集）……92
遍照（古今集）……94
雲林院の親王と遍照（古今集）……96
小町と遍照（後撰集）……98
小野と康秀（古今集）……100
吹くからに（古今集）……102
素性（古今集）……104
竜田川（古今集）……106
業平と高子（古今集）……108
業平と基経（古今集）……110
渚の院（古今集）……112
惟喬親王の出家と業平（古今集）……114
惟喬親王と遍照（古今集）……116
白雲の（古今集）……118
敏行1（古今集）……120
敏行2（古今集）……122
敏行3（古今集）……124
敏行4（古今集）……126
敏行5（後撰集）……128
敏行6（古今集）……130
行平1（古今集）……132
行平2（古今集）……134
光孝天皇（古今集）……136
光孝天皇と遍照（古今集）……138
芹川行幸の復活（後撰集）……140
行平自祝歌（後撰集）……142
物名の歌（伊勢物語）……144
折句の歌（古今集）……146
沓冠折句の歌（栄花物語）……148
歌病（拾遺集）……150
序詞考（伊勢物語）……152
忘草（伊勢物語）……154
たまむすび1（伊勢物語）……156
たまむすび2（袋草紙）……158
たまむすび3（伊勢物語）……160
なかった業平と高子の密会（伊勢物語）……162
武蔵野は（伊勢物語）……164
和歌のリズムの効用（源氏物語）……166
紫式部集の歌（紫式部集）……168
大江山（金葉集）……170
みかの原（新古今集）……172
伊勢（新古今集）……174
式子内親王（新古今集）……176
俊成の幽玄（千載集）……178
俊恵・長明の幽玄（新勅撰集）……180
貫之の業平評（古今集）……182
古今集真名序にある幽玄（古今集）……184
定家の本歌取りの論（新古今集）……186
定家の有心体1（新古今集）……188
定家の有心体2（新古今集）……190

良経（新古今集）……192
定家の本歌取りの論補足（古今集）194
褻の歌と晴の歌（新古今集）……196
慈円（新古今集）……198
西行1（新古今集）……200
西行2（新古今集）……202
源実朝（金槐集）……204
後鳥羽上皇（後鳥羽院御百首）……206
あとがき……208

口絵写真撮影――長尾　宏

古歌への誘い

八雲立つ

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を

伝須佐之男命
（『古事記』上巻）

『古今集』仮名序は、和歌の起源を語る中で、「あらがねの地にしては須佐之男命よりぞ起りける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず、素直にして、言の心わきがたかりけらし。人の世となりて、須佐之男命よりぞ三十文字あまり一文字はよみける」と述べている。今日の『古今集』序には古注が竄入しているが、掲出歌を『古事記』に従って須佐之男の「三十文字あまり一文字」としてあげており、これをもって、しばしば和歌の起源としてきたのである。

しかし、この『古今集』序は矛盾を孕んでいる。須佐之男は地上に降りてきたとはいえ、天照大神の弟で『古事記』上巻における神であるのに、「人の世となりて」といっている。この矛盾自体、「三十文字あまり一文字」は須佐之男という神の作ったものではなく、「人の世」の人が作ったものであることを思わせる。

ところで『古事記』では、「目は赤かがちの如くして、身一つに八頭・八尾あり。亦其の身に苔また桧・杉生ひ、其の長谿八谷・峡八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常に血煉れたり」と描写さ

れる八俣大蛇を退治し、櫛名田比売と聖婚する須佐之男の自祝歌としてこの歌がある。しかしこれをそのように読むことのできる根拠は、わずかに「妻籠みに」という五音だけである。これを除いてみると地上から湧き立つ雲への賛歌であろう。八雲・出雲・八重垣の韻律は呪性を帯び、これが共同体の歌謡であったことを思わせる。

右にみる八俣大蛇の描写自体が、出雲地方の幾つもの尾根の分かれた山谷の実景を思わせる。太古においては、神の創造した自然への脅威があればこそ自然への賛歌があった。自然との闘いは神から与えられた試練であり、それをのり越えて稲田を作り豊穣の秋には祭をした。櫛名田の父足名椎は、「我が女は本より八稚女在りしを、是の高志の八俣のをろち年毎に来て喫へり。今、其の来べき時なる故に泣く」と須佐之男に訴えている。「八」は数の多いことを示し、「年毎に」と合わせて、須佐之男の神話には、年毎の豊穣をよろこぶ集団の祭が思われる。櫛名田が稲作と関係のあることは指摘されてきた。そして、「其の長谿八谷・峡八尾」を渡るという大蛇を十拳剣を抜いて切りまわる須佐之男の姿は、祭における舞を思わせる。

「八雲立つ出雲八重垣」は、やはり幾つもの山谷から立ちのぼる雲（実は霧）を賛美したのだろう。「妻籠みに」は、この自然賛歌における囃子詞ではなかったか。それがここで囃子詞となり得るのは、祝婚もまた豊穣を祝う気持とつながるからであった。

和歌の起源が、このような原初における祭の中の歌謡にあったことは、おそらく確かなことであった。